就学猶予クレヨンポキポキ折りて泣きし

折れたクレヨン

私の身障歳時記

花田春兆

ぶどう社

私の身障歳時記

折れたクレヨン

花田春兆

ぶどう社

花田　春兆（はなだ　しゅんちょう）
大正十四年生れ。出生時よりの脳性マヒによって、現在も歩行・起立ともに不能。
昭和九年、東京市立光明学校（現光明養護学校）入学。小学校課程を了えて補習科に学ぶ。
昭和二二年、身障者同人誌『しののめ』を創刊し、以後一貫して編集に当る。
昭和三八年、俳人協会全国大会賞受賞。現在、俳人協会員、俳誌『萬緑』同人。
〈主な著書〉
『端　午』（さいかち発行所）
『天日無冠』（刀江書院）
『鬼気の人』（こずえ）
『心耳の譜』（こずえ）
『いくつになったら歩けるの』（ミネルヴァ書房）
現住所　東京都港区元麻布一―五―十六

折れたクレヨン
私の身障歳時記
昭和五四年三月　一日　初版発行
昭和五四年四月二十日　三刷発行
著　者　花田春兆
発行人　市毛研一郎＋田島純夫
発行所　ぶどう社
東京都文京区千駄木四―二―一四
電　話　〇三―八二八―三〇七四
印刷／東銀座印刷　製本／東京美術紙工

索　引

「端」……句集『端午』(1949年)
「天」……句集『天日無冠』(1963年)
「後」……句集『天日無冠』以後

【あ】

青蜥蜴……「後」70
秋扇……「端」114
朝鈴や……「後」126
朝より鋭声……「天」136
足なえは……「端」20
あてどなき……「天」120
雨の鵙……「後」138
歩かぬは……「天」64
歩き居し……「端」100
生くるべし……「後」84
一姫二太郎……「後」128
一葉忌……「天」152
いろは積木で……「天」26
踊太鼓……「天」102
鬼打つや……「後」184

【か】

カナリヤの……「天」174
かまど猫……「天」168
鬼城忌の……「後」112
木の実独楽……「天」130
君が呉るる……「天」116
君の瞳を……「後」104
今日不遇……「天」140
虚子の星……「後」144
車椅子の……「後」52
後頭暑し……「天」90
稿料「万」と……「天」62
凩叫ぶ……「天」158
東風つのるな……「後」16

【さ】

寒く答ふ……「天」148
四肢勁く……「後」182
邪教にも……「後」80
師友一如……「後」38
就学猶予……「天」28
春闘の……「後」54
隙間風……「後」164

【た】

多佳子忌の……「後」58
たたみても……「後」154
父とならむ……「後」172
勁き脚に……「天」92
手の汗が……「後」78
天職欲し……「天」60
手ン棒清作……「後」142

透明の……「天」40
どこまで汀……「天」50
友の進学……「天」30

【な】

虹仰ぐ……「後」88
濡るる春星……「後」44

【は】

葉籠る山茶花……「天」162
裸子の……「後」96
花翳れば……「天」24
バラの芽真紅……「後」42
春立つや……「天」12
春の苺……「後」46
光る夏雲……「天」86
引返す……「後」32
一指で……「後」132
雲雀冲天……「天」48
病院通いに……「天」82
「昼行燈」は……「後」156
瓶に蝌蚪……「後」36
吹かるる落葉……「天」160
不具よりも……「天」124
蕗の薹……「後」14
法師蟬……「後」108
歩行器に……「天」22

【ま】

瞬けば……「後」176
マヒの手の……「後」76
マヒ真似て……「後」74
水餅や……「天」180
実千両……「後」170
身に月光……「天」118
虫買うや……「天」122
胸厚き……「後」178
鵙呼応……「天」134
木歩忌の……「後」110
もの書きても……「天」18

【や】

雪昏し……「後」166
倚り立てと……「後」94

【ら】

緑蔭無音……「天」72
龍胆や……「天」106
劣等感……「天」34
炉辺ちらかし……「天」150

【わ】

若き広背に……「後」68
我れにあるは……「天」66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

水上　勉

花田春兆さんの俳句は『しののめ』誌で拝見したのが最初だが、凍て土を裂いて出て、音をたてて ひらく蕗の薹のつよさと清冽さを見た思いがした。私はじつは、まだ薹の芽立ちを見たことがないのだが、花田さんの句の力にそれを見たというのである。散文を書いて生きる私に、いま花田さんの俳句を論じる仕格はない。道を知らぬ者が、道を知る人に教えられるのは道理だが、つづめて云えば、句道のようなものを、花田春兆は私に教えたのである。それはこの人のゆるぎない人生観のふかさとかさなってあり、作品はいつも、その道心と根を一つにするこの人の花である。常識ではあるが、きわめて困難な文芸上の達成を花田さんは短かい十七文字に封じこめ、いま独自の境涯にある、ということだ。

こんどの句集は、えらばれた秀句に花田さん自身の添え書きがなされてある。この文章が、また

私のような春兆ファンの心をゆさぶってつきない。たとえば、このようなことを花田さんは書く。

「そういうなんとも極端な劣等感に襲われた日があった。障害のためとばかりは言いきれないような、人間的未熟さをさらけ出してしまったな、と感じた時、どうにもたまらない惨さが覆い冠さってくるのだった。障害のためのことなら、救いがないように見えても、障害さえなければ……ということで、逃げ場をつくることも出来た。それが出来ないとなると、もうどうにも身の置きどころがなくなってしまう。穴があったら……。いや、こんな気持では穴の中は暗すぎる。変身してしまいたいが、犬では大きすぎる。虫か貝がいいかな……。そうだ、蝌蚪＝オタマジャクシがいい、声も出さずに水に流されて行くだけ……。頭でっかちで、手も足も出ないというのも、私に適わしいかもしれない」

ふかい闇の思いから次のような秀句が出てくる。

劣等感湧く日よ蝌蚪ともなりたき日よ

私は花田さんとあった日のことを、はっきりおぼえている。それは、光明養護学校の廊下でだった。その日、学校では何かの祭りのようなものがひらかれていた。父兄の顔もあった。花田さんのような重度障害の子らも大人もいた。私は、そこで、偶然に、花田さんとすれちがうところを紹介されて、わずかな立話をしたのだった。その時、花田さんは、自宅に建設中の「部屋」について語

った。それは、大きなスペースを必要としない三畳ひと間でいいから、自分たち文芸の仲間が、集まる場だというのだった。花田さんは、手ぶりをしてみせて、その小さなスペースについて語り、私に落成の日の近いことを告げて去った。

春立つや身に副うは春兆の号一つ

学歴、職歴、家歴、何一つ自分のものだといえるものがない。飾りとなり、重みとなるものが何一つ無いのである。なにか、わが身に付くもの、付きしたがってくるものがほしい。そういう思いの闇から、ふき出たのがこの句だ。句集『天日無冠』はこの名句からはじまる。

私はいま、ひとりの障害の女性と、くるま椅子に坐ったままで動かせる人形遣いを勉強中である。私もそのひとも、根がつきて、自信を失なう日が多い。こんなことをしつづけていても、本当に稔りの芸が体得できるものかどうか、とそのひとはよくつぶやく。私はこたえることばがない。黙ってやってきただけだが、じつは、この『天日無冠』をさし示して、そのひとに、このような境地になれ、というしかないと思う。私のように、そういう勇気づけられて仕事をはじめる「ことば」を、この句集から得た人は、津々浦々にゴマンといるだろう。

花と翳と

久保田　正文

俳句、短歌、詩などの作品について、作者が自註をくわえた文章は、これまでもかなり多くよんだ。斉藤茂吉の『作歌四十年』などは、その代表的なものであろう。

一般的に言って、作者自註文章が自画自讃になってしまえばはなはだつきあいにくいが、むしろこの種の文章では筆者が、自画自讃になるのを警戒しすぎて、逆に叙述が痒いところへ掌がとどかず、読者がもどかしい思いをするばあいがすくなくないようである。斉藤茂吉の、あの書物にしても、いくらかえんりょがちに、制作の動機、その条件の説明で終るばあいが多いようにみえた。

花田春兆さんの、こんどの『折れたクレヨン――私の身障歳時記』は、そこがじつにうまく行っているとおもった。自画自讃などという弱さからはもちろん、まったくまぬがれているが、しかし主張すべきところはちゃんと言いきっている。たとえば、

君が呉るる葡萄一粒づつに君

という句の解においてそれはあらわれている。

足なえは足こそ冷ゆれ春時雨

身に月光歩かぬかかと柔かし

これらの句は、おそらく作者のような身体障害者に独特なもので、そのことなくしてはうまれ得ない句であろう。それだから、自解があることによって普遍的に生きる。深刻な感覚であるけれども、作者はそれを深刻がらず、むしろ〈身に月光〉の句につけた文章においては、結果として一種のユーモアさえ底に光らせながら淡々と、おしつけがましくなく書ききっている。〈足なえは〉の句につけた文章前半の、鋭い感覚性などは、おどろくほどのリアリティを獲得している。すべて、センティメンタルな調子からまったくまぬがれている。

花翳れば責道具めく訓練具

青蜥蜴蔑む視線に身を透かさむ

これらの句にも、それぞれ八百字ほどの文章がつけられているが、小説にたとえれば八十枚でも

書ききれぬほどの内容が凝集されている。前者は、たとえば感覚派の小説として極めて質のいいものというおもむきであり、後者は、相当にできのいい心理主義小説も及ばぬほどの内面が複雑に襞をたたみこんでいるというおもむきである。

この作者には、どこか向日的な明るさがある。生得的なものではあるだろうけれども、身体障害者として、屈折や挫折の危機をいく度も経験したらしいことは集中のあちこちににじみ出ているが、それらをのりこえて、このような表現にまで到達するのには、語りつくせないほどの過程があっただろう。

雲雀冲天不具なるも俯向くこと欲せず

マヒ真似て片蔭どこまで蹤き来る子

今日不遇蝗もみんな尻向け居り

これらの句につけた文章から、その気配はおのずからうかびあがる。〈マヒ真似て〉の句の解で、〈チンドン屋でもあるまいし、と怒鳴りたくなる一方では、どこまで来るのかな、と親しみさえ湧く。〉と転換してゆくところに、じつに複雑な妙味がある。ユーモアのことは前にも言ったが、自己を客観視しうる複眼をこの作者は身につけていて（そのことは、他の多くの句についても指摘しうる）、それが俳句の根本的詩精神としてのユーモアの美を有効に生かす資質になりえてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るのであろう。

俳句作者として当然のこととも言いうるが、題材・テーマを社会的視野にまでひろげて、積極的にうたっていることにも注目される。

歩行器に油さす母春の虹

この一句につけた文章は、おのずから身体障害者の歩行訓練についての意見に到達している。

友の進学羨みし日よ霞みし日よ

師友一如校庭のヒビ陽炎生む

これらの句の解は、国の身体障害者教育の思想と制度とがどのように前近代的に不合理なものであるかについての怒りを内包している。戦時中、小学校を卒えてのち、家のちかくの私立中学へ聴講生として通学することを志望したとき、軍事教練就学不可能を楯にして許可されなかったという。軍事教練を先頭に立てて、あのころの教育制度はすべて左右されていたのである。

雨の鵲昭和史起結相似るな

東風つのるな松籟にふと兵馬の声

光る夏雲健ならば夙く戦死の身

春闘の果て淡し蝌蚪が尾を消しゆく

隙間風のごとき我等か庁の内へ

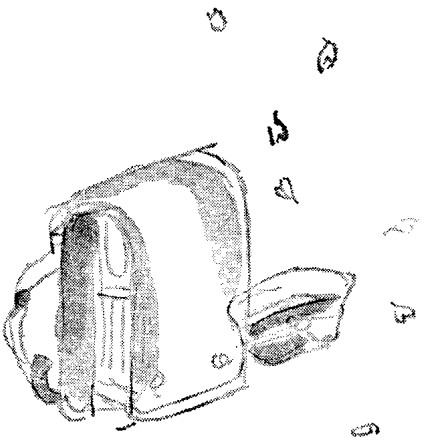
はじめの三句は、もちろん戦争の時代を苦しい思いをして生きてきたものに共通する感情である。あとの二句は、身体障害者として生活権をまもるために立ちあがった経験をもとにしている。車椅子をうごかして、デモ・陳情に参加しつつ、しかし権力に立ち向うものがいつもそのこころの底のどこかに感じているむなしさ（それは同時に、権力の壁の厚さに対する怒りでもある）が、複雑な陰翳となって余韻をひいている。

いうまでもなく、恋愛から結婚、そして二人の元気な子供の誕生・成長をうたった句も多く、それらにつけた文章とともに、すなおな明るい光を、この集いっぱいにひろげていることも見おとせない。それらの句や文章も、行き過ぎず、また行き足らずにおちいることなく、作者の人生と文学との充実をものがたっている。

（79・1・28）

学令の満六才を迎えても　普通に通学出
ないとき、就学猶予願いという書類を要い
届け出なければならない。親としても、み
くしても入学を望んでいないわけではない
そんなものを書かなければならないのは
貧わすれた現実のきびしさを、改めて強
感させることになるのだった。その就学
を私は、どうしても二度とわたって味あ

春



春立つや身に副うは春兆の号ひとつ

花田政国。大正十四年十月生れ。都立光明養護学校（現在名）研究科修了。但し正式な卒業証書は小学校だけしか無い。職業無し。『しののめ』という身障者グループの機関誌の、編集責任者にはなっているが、職業なんて呼べるものではない。独身。両親が健在なので、まず日常生活には困らないけれど、自分の家庭と呼ぶには、少し変な気がする。

というのが、この句を作った当時、つまり昭和三一年頃の私の身上書である。

学歴・職歴・家庭歴とすべてにわたって、これが自分のものだと言えるものがない。飾りとなり、重みとなるものが何一つ無いのである。まさに根を持たぬ寄生木（やどりぎ）。心もとないこと夥（おびただ）しい。なにか我が身に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com